

YU ZAWA SITE  
湯 沢 遺 跡

発掘調査報告書

1990. 3

山梨県教育委員会  
山梨県土地開発公社

## 序

本書は、1989年に山梨県埋蔵文化財センターが実施しました、北巨摩郡高根町下黒沢字湯沢に所在します湯沢遺跡の発掘調査報告書であります。湯沢遺跡は、山梨県土地開発公社による駿北中核工業団地造成事業に伴い1983年に高根町教育委員会の実施しました20,000m<sup>2</sup>に及ぶ調査で、平安時代の官衙的な様相をもつ遺跡として全国的に知られるに至りました。今回の調査はその南側にあたる小山の緩斜面の植栽等の緑地整備に伴うものであります。

調査の結果、平安時代の堅穴住居址1軒、平安時代以降の炭焼き遺構1基、中・近世の溝4本などが出土しました。平安時代の堅穴住居址は出土遺物からみて9世紀中頃のものと思われます。破片ではありますが武藏型の甕がみられその分布地であります長野県佐久地域との交流が推定できます。また、大型完形の鉄鎌の出土もその出土状態も含め着目されます。炭焼き遺構は、須玉町中尾城遺跡などで類例が見られます、その時期については伴出遺物に乏しく不明です。炭を使用する小鍛冶遺構が平安時代の八ヶ岳山麓に多く見られることなど考え合わせ、今後注目すべき遺構です。また、地すべり地形の存在が確かめられたことも大きな成果であります。当地域の災害史や遺跡の立地を考えるときのひとつつの視点となると思われます。小範囲の調査でしたが、これらの成果が今後の研究の一助となれば幸甚です。

末筆ながら、調査に当たってご助力いただきました関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚くお礼申し上げます。

1990年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

## 例　　言

- 本書は、山梨県北巨摩郡高根町下黒沢字湯沢3054-3に所在する湯沢遺跡の発掘調査報告書である。1983年に高根町教育委員会が行った発掘調査地域の南側にあたる地点である。
- 本調査は、峡北中核工業団地Dブロック内の植栽等緑地整備のための事業に伴うもので、山梨県土地開発公社から委託を受け、山梨県教育委員会が実施した。
- 発掘調査および出土品の整理・保管は、山梨県埋蔵文化財センターが行った。
- 本書の執筆は、「VI-2. 高根町湯沢遺跡の地すべり地形」を河西学氏（御帝京大学山梨文化財研究所）が行い、他は保坂康夫（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）が行った。編集作業は、浅利司（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）と保坂が行った。
- 整理作業参加者は、下記のとおりである。

塩島博夫、米山八重子、土屋ふじ子、江川勝子、出月満寿江

- 本調査にあたり、地形・地質調査を御帝京大学山梨文化財研究所に委託した。また、遺物分布測量、遺構実測に光波測距儀とコンピュータによる遺跡調査システム「サイト」（コンピュータ・システム㈱）を使用した。

- 発掘調査に際し、次の方々より御協力をいただいた。衷心より御礼申し上げる次第である。  
(敬称略)

戸島淑彦、深沢俊晴（山梨県土地開発公社）、雨宮正樹（高根町教育委員会）、桜井真貴（長坂町教育委員会）、山路恭之助（須玉町教育委員会）、丸茂博男（和田区長）、桜井寿秋（打越乙坂区長）、堤二三夫（塙川区長）、関宏次、山中克己（日本酸素開発本部山梨研究所）、深沢裕三

## 目　　次

I 調査に至る経過	1
II 調査組織	1
III 調査の方法と経過	1
IV 遺跡の立地と環境	3
V 遺構と遺物	
1. 1号住居址	5
3. 小ビット群	12
5. 遺構外出土遺物	15
VI 地すべり地形について	
1. 土層	20
2. 高根町湯沢遺跡の地すべり地形	21
VII 結語	25

## I 調査に至る経過

湯沢遺跡は、1983年（昭和58年）に高根町教育委員会によって発掘調査され、官衙的な特徴を持つ平安時代遺跡として全国的に注目された遺跡である。20,000m<sup>2</sup>ほどが発掘調査され、9世紀中頃から10世紀前半にかけての堅穴住居址27軒、掘立柱建物址13棟、柵列が出土した。東西方向に設定された柵列は造構群の南端を区画しており、その両端に望楼と思われる総柱の掘立柱建物址が配置され、中央には門と思われる施設もみられた。出土遺物では金銅製の小型の鈴や石製の鎧甲、隆平永宝などが注目された。この他、縄文時代中期の住居址8軒も検出されている（第3図）。

湯沢遺跡は、山梨県土地開発公社が進める峡北地域中核工業団地の造成に伴い発掘調査されたが、1987年（昭和62年）11月に、高根町教育委員会が調査した地域の北側にある緑地部分についても公園等のため造成する可能性があるので調査をしてほしいとの打診が土地開発公社から県教育委員会の文化課になされた。調査を担当する県埋蔵文化財センターの調査体制が整わないため、1989年（平成元年）以降でないと対応ができないということで、その後も継続して協議を続けることとなった。その間、その工場用地は、日本酸素株式会社が入居し、調査済みの地域に工場建設が着工された。

1989年（平成元年）度に入り、当地（峡北地域中核工業団地Dブロック中央緑地）について調査を行うことになった。事業主体である山梨県土地開発公社から委託を受け、土地の所有者である日本酸素株式会社の御協力を仰ぎ、1989年（平成元年）7月31日から10月26日にかけて、約5,000m<sup>2</sup>の対象地域を調査した。

## II 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

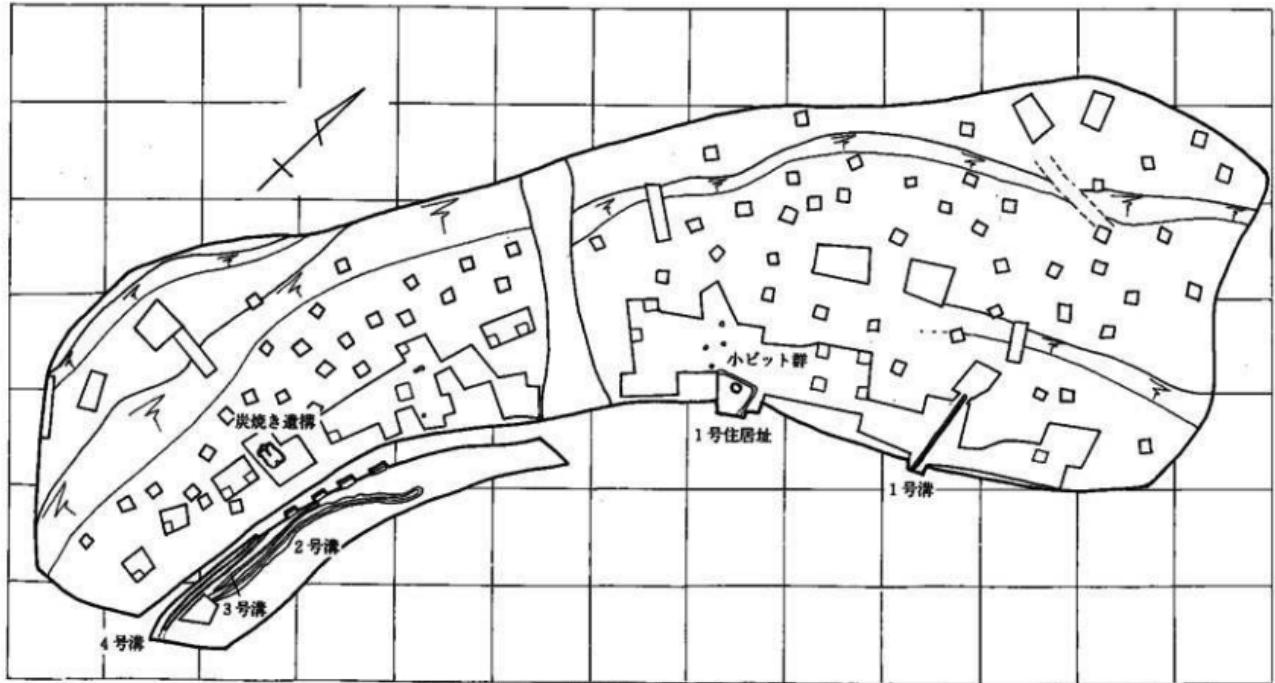
調査担当者 渋利司（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）、保坂康夫（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）

調査作業員 藤野松平、八巻久子、八巻栄、滝田武子、井富保仁、鈴木節子、若林松子、小沢三七子、日向一子、小沢みづえ、小沢福子、平崎弘子、日向たま、小宮山きよ、八巻重子、八巻隆子、清水梅子、長田澄子、鈴木はる美、鈴木かず子、矢羽とし子

協力機関 高根町教育委員会

## III 調査の方法と経過

発掘調査対象地は、林地となっていたが、土地の所有者の意向で、木立はそのまま残した状態で調査することになった。まず、造構・遺物の有無確認のための試掘坑を対象地域のほぼ全域におおむね5m間隔で設定した。その結果、より低く平坦な部分（調査対象地域の東辺部）



第1図 調査坑および遺構位置図(1/400、方格の一辺が10m)

に遺構・遺物が多く確認された。そこで、対象地域の東辺部について調査区を拡張し、面的に調査した（第1図）。その結果、平安時代堅穴住居址1軒、炭焼き遺構1基、溝3本、小ビット群1カ所を検出した。また、遺物は、縄文時代から近世に至る土器や石器、金属器が出土した。これらは、光波測距儀と小型コンピュータを用いたトータルステーションを用いて位置データ等を全点記録した。

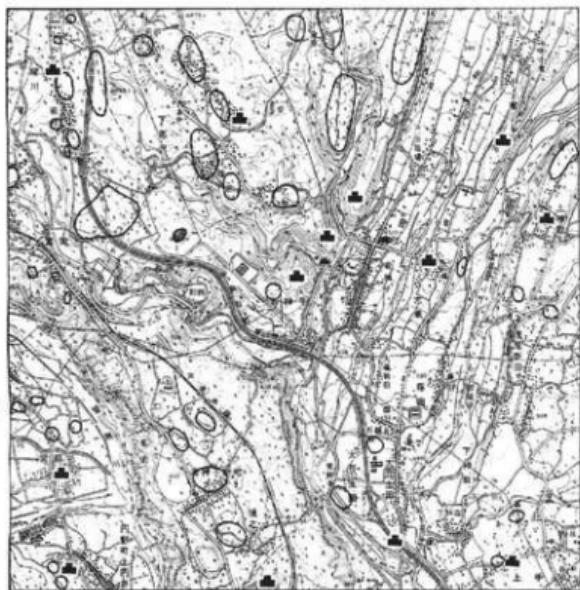
また、調査対象地域には、コンターラインに沿って段状の地形がみられた。この地形の成因について調査するため土層観察のための調査溝を3本設定し、土層断面の調査を行った。その際、帝京大学山梨文化財研究所に調査を依頼し、その成果は「IV 地すべり地形について」（P20）で、調査に当たった同研究所の河西学氏によって報告されている。

なお、本調査は1989年7月31日の下草刈りから開始し、同年10月26日埋めもどし完了をもって終了した。

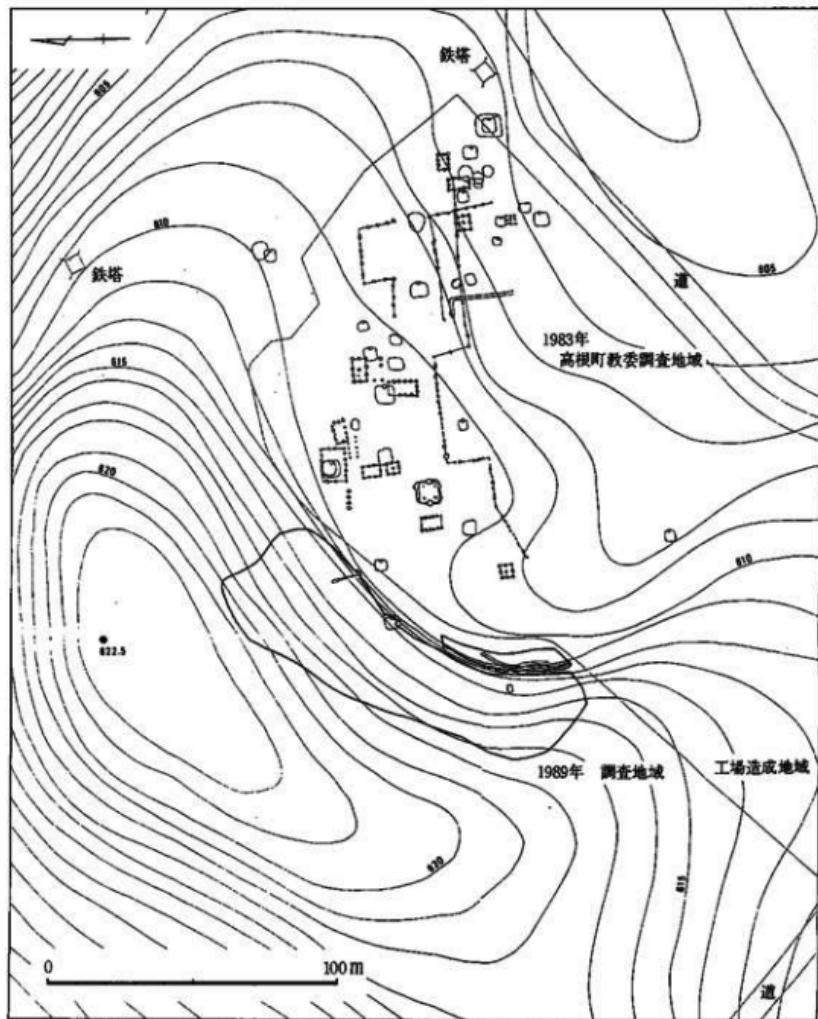
#### IV 遺跡の立地と環境

本遺跡は、山梨県北巨摩郡高根町下黒沢字湯沢に所在する。八ヶ岳山麓の南端部に位置する。巨視的に地形を概観してみると、東方では塩川、西方では釜無川の下刻作用によって比高100m近い崖線が発達している。ちょうど本遺跡のやや南方付近で両河川はくの字に流下する方向を変え、ほぼ平行に流れるが、その流れによって南北に細長いわゆる七里ヶ岩台地が形成されている。本遺跡はその付け根部分に位置している。より微視的に地形をみると、本遺跡北方には大泉村方向から流下した甲（かぶと）川、南方には長坂町方向から流下した鳩川が流れ、八ヶ岳南麓台地に深い谷を刻んでいる。

両河川に挟まれた幅500mほどの南東方向にのびる台地上に乗る。本遺跡は、この台地上に乗る比高10mほどの小山の南東部に位置する。こうした小山は、流れ山と呼ばれ、八ヶ岳南麓でも南辺部一帯



第2図 湯沢遺跡周辺の遺跡と地形(1/50000)



第3図 湯沢遺跡の遺構分布と地形

に発達している。これは、20万年前と言われる莊崎火山岩屑流にみられる八ヶ岳火山体の大崩壊時に岩屑流中に含まれていた山体の一部が基盤となっているとされる。こうした、小山の南東部に位置するが、さらに微視的にみると、小山斜面を弧状に抉るような地形とその前面に広がる非常に平坦な地形とがみられる点特徴的である。湯沢遺跡の本体部分（1983年調査地域）は、平坦な地形部分に立地している（第3図）。今回調査地点は、この湯沢遺跡本体の背後に

あたる小山の斜面部分である。本体部分とは、比高2mほどの弧状の段によって区画される。周辺の遺跡の分布をみてみると（第2図）、縄文時代、平安時代、中世の遺跡が多く見い出されている。弥生時代から古墳時代、奈良時代にかけての遺跡は非常に少ない点特徴的である。その中でも、須玉町若神子にある2基の後期古墳（湯沢古墳、若神子小学校古墳）の存在は注目に値する。平安時代に入って、この地域では少ない9世紀初頭の住居址が見い出され、縄釉陶器や瓦などが多く出土した大豆生田（まみょうだ）遺跡の存在も考え合わせると、7世紀から9世紀にかけて、有力勢力がこの地域を中心に存在していた可能性を考えさせられる。この地域は、八ヶ岳南麓の東半部や奥秩父西部の広大な地域に流域を持つ河川が全てここに集合している。古い交通路もこうした河川とかなり関連を持っているとすれば、交通の要所として本地域は着目される。おそらく、こうした交通上の利点から、本遺跡を含め、上記のような特徴的な遺跡が発達することになったのだろう。こうした点は、中世以降も注目され、若神子城をはじめとする城館址が本地域に多く存在している。

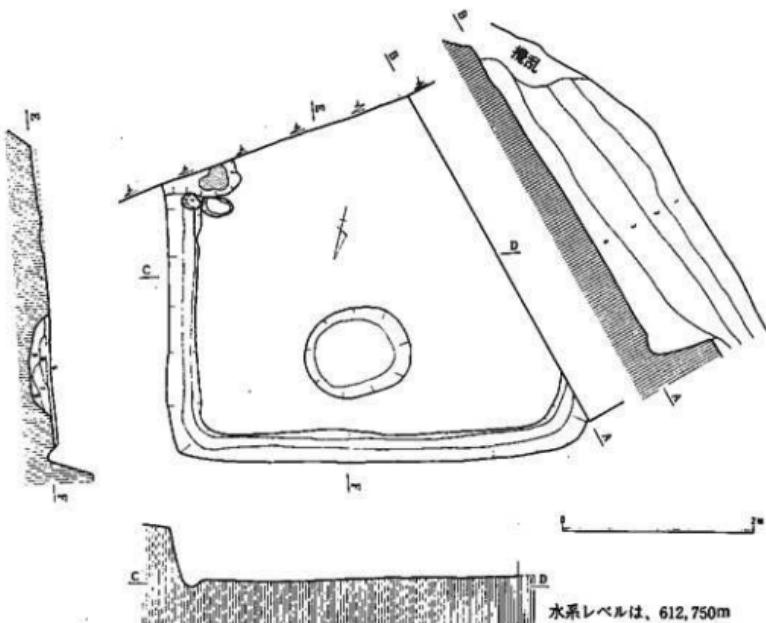
## V 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、平安時代の堅穴住居址1軒、平安時代以降と思われる炭焼き造構1基、中世以降と思われる構3本、時期不明の小ピット群1カ所である。ここでは、これらの遺構の特徴や出土遺物について記載する。

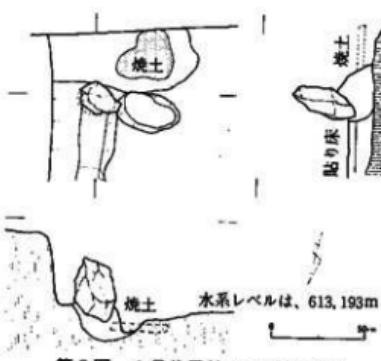
### 1. 1号住居址

遺構 1号住居址は、調査地域のほぼ中央、湯沢遺跡本体部分とを画する比高2mほどの段の肩部に位置する（第1図）。本住居址は、この段状の地形によって南部を削り取られている。また、西部については、赤松の木立のため未調査である。しかし、北東および北西コーナーを把握し、またカマドも一部残存していたことから、おおよその規模は推定可能である。北辺は4.4m、東辺は2.8mが残存している。おおむね1辺4m規模の隅丸方形プランの堅穴住居址と思われる。深さ60cm前後の壁の残存状況は良好である。壁の直下に、幅20cm前後、深さ10cm前後の周溝がめぐる。南東隅にはカマドが半分ほど残存するが、北東コーナーからの距離やこの時期のカマドのあり方からして、東南コーナーからやや北東コーナーによりに設置されていたものと思われる。また、床面下に土坑が確認された（第4図）。

まず、土層をみてみると、1層が黄褐色軟質土層である。調査地域の各所に分布がみられ、腐植層直下にみられることから、かなり新しい時期に形成されたものと思われる。おそらく、周辺の畑の耕作で露出したローム層が風で再堆積したものと思われる。この土層の中には遺物がほとんど見られない。2層は、暗褐色土層である。ローム層の微粒子を少量含み、非常に均質な土層である。上下の土層との境界が非常に明瞭であるのも特徴である。土師質土器や内耳土器、陶器など、中・近世遺物を包含する土層で、1層の風成堆積土層に急激に覆われた旧耕作土層であろう。3層は、黒色土層で全域にみられる自然土層である。特に住居址部分で厚く堆積しているものと思われる。この土層内にはほとんど遺物の分布がみられない。4層は、住居址覆土で暗褐色土層である。ローム層粒子や焼土粒子を多く含む。なお、住居址プランはロー



第4図 1号住居址(1/60)



第5図 1号住居址カマド(1/30)

ム層上面で確認したが、掘り込み面はローム層直上の暗褐色漸移層上面からと思われる。次にカマドについてみてみると(第5図)、北側の抽石1個と掘り込み、焼き口部分と焼土の広がりが確認できた。抽石は長さ30cm、幅20cm、厚さ15cmほどの扁平な角礫を用いて直立させている。それを、床面から15cmほど掘り下げた周溝内に埋設している点特徴的である。埋設のしかたを南北方向の断面でみると、まず周溝をローム層小ブロック混りの黒色土層が埋め、その上を貼り床が覆う。

その両者を切るように、抽石を埋設する暗褐色土層がみられる。抽石北側の貼り床は平面図北側の小破線部分でなくなり、周溝が露出する。このようなあり方からして、もとあった周溝を埋め、貼り床をして、抽石を埋設しているようと思われる。

この抽石の前面には、長軸35cm、幅20cm、深さ5cmほどの浅い掘り込みがみられる。残存す

る袖石より小型のものを2個程度埋設したものと思われる。焚き口および燃焼部には、床面より15cmほどの深さの掘り込みがみられた。南側を段地形で切られており全体像は不明であるが、残存状況からして、ほぼ南側の袖石直前あたりまで残存しているものと推定される。中央に焼土が東西30cm、南北25cmにわたって分布するが、断面図でみられるように掘り込み底面から5cmほど浮いた状態である（破線部分）。おそらく、この上面が燃焼面と思われるが、袖石の最深部より深い位置にある点注目される。煙道については、それと思われる構造を確認することができなかった。カマド部分の壁は、段地形形成後にかなり擾乱を受けており、そうした構造が消失しているものと思われる。

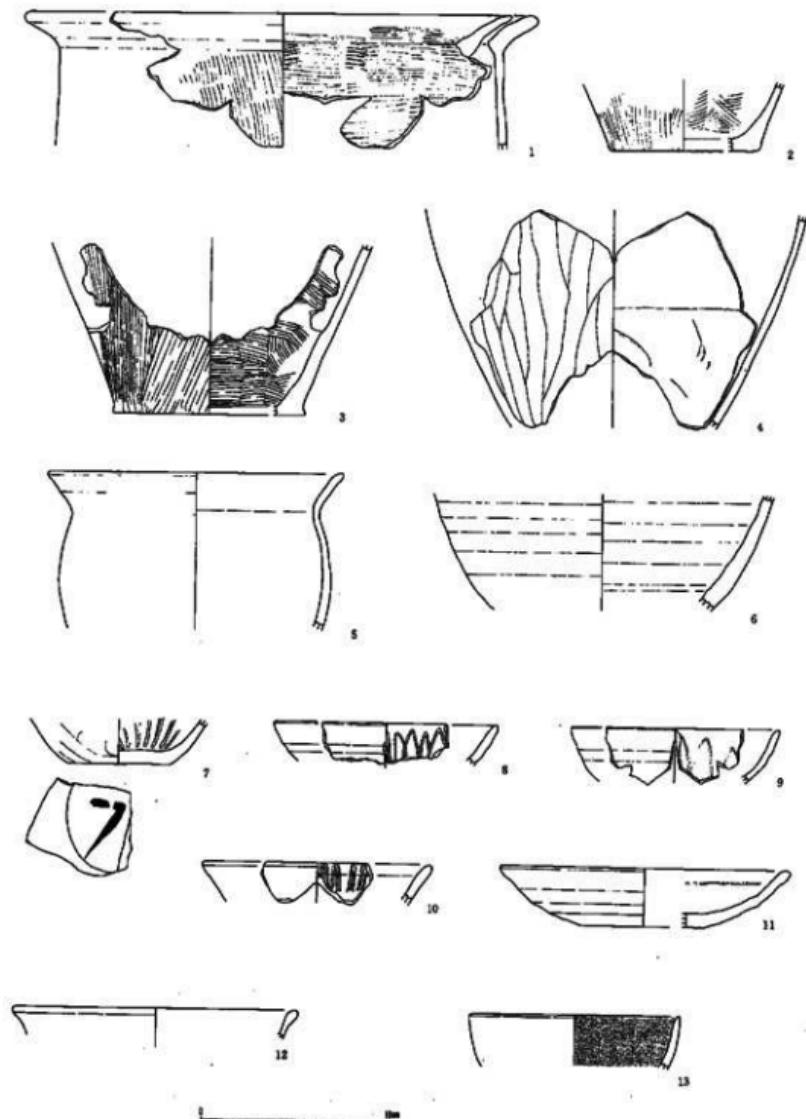
次に床面の状況であるが、全体がPm-I（御岳第1軽石層）直上のハードローム層まで掘り込まれており、基盤となっている土層自体が非常に硬く締まっている。一方、先述したカマド北側および床下の土坑付近には貼り床がみられる。土坑の断面をみると（第4図）、5層が暗褐色土の貼り床層で5cm程度の厚さである。6層は暗褐色土層で、5層より軟質でPm-Iブロックを少量含む。7層は硬質なPm-Iブロック。8層は全体に硬質な暗褐色土層で、Pm-Iブロックをあまり含まない。9層は軟質なPm-Iブロックである。遺物はみられなかった。

遺物 1号住居址内から豊富な遺物が出土した（第6・7図）。まず、土師器甕であるが甲斐型甕、武藏型甕、ロクロ整形甕がみられた。1～3が甲斐型甕である。1は、口縁部を含む部分で8点が接合している。いわゆる薄口縁型である。外面頸部以下に縦方向のハケメ、内面は頸部以下に横方向のハケメがみられる。黒赤褐色を呈し、胎土に白色粒子や雲母が多く含む。2は底部破片。3はやはり底部であるが5点の破片が接合し一周するため、2とは別個体である。したがって、1号住居址には少なくとも2個体の甲斐型甕が廃棄されているものと思われる。3は底部内側が欠落している。

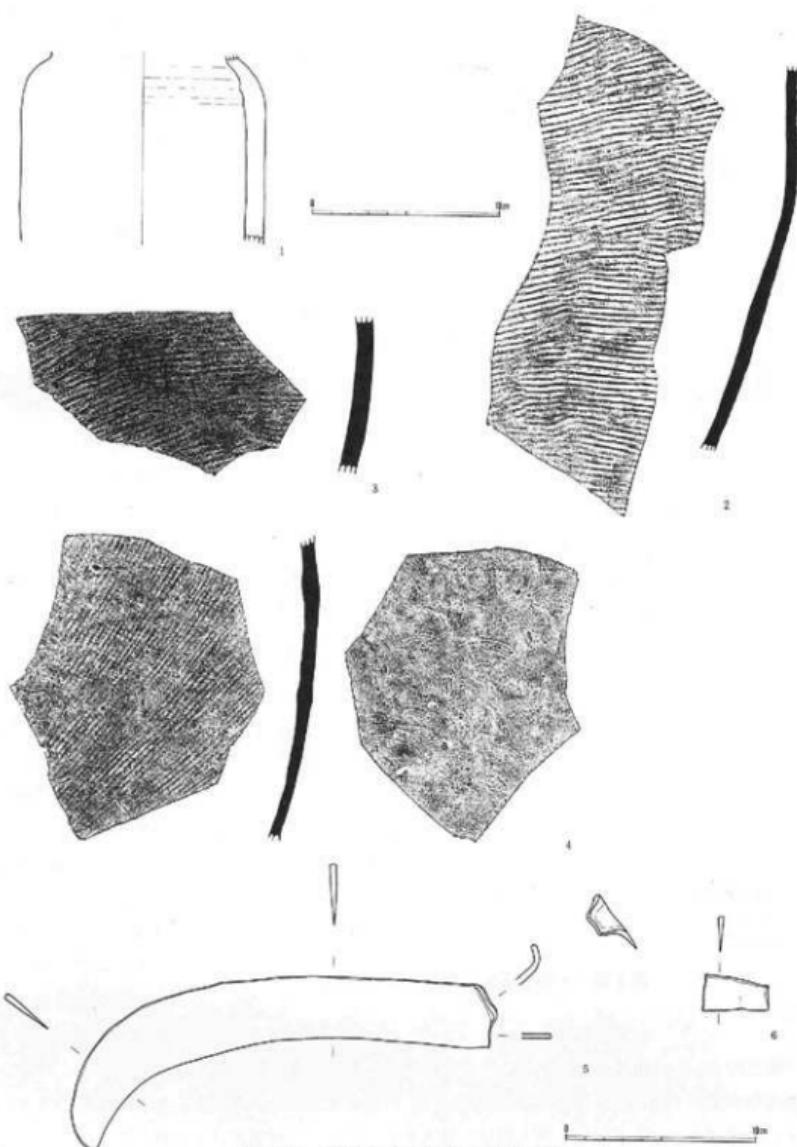
4は、武藏型の甕の胴下半部の破片と思われる。器壁が2mm程度、底部側で4mm程度と非常に薄い。胎土に微細な白色、透明粒子や黒色で光沢のある錐状の鉱物（輝石）を多く含むが、甲斐型のような雲母はほとんど含まない。外面暗褐色で、内面が黄褐色である。調整は、外面では、上方から下方への縦方向ヘラケズリが密にみられる。内面では、ヘラ状の工具によるナデ状の調整が横方向と斜方向とにみられる。また、粘土紐の接合痕が溝状に残存している。武藏型の出土例は、蘆崎市の北下条遺跡で奈良時代前半のものが出土している程度で、ほとんど出土例がない。

5、6はロクロ整形甕であるが、いずれも小型甕と思われる。5は、胎土に石英、長石粒子および若干の岩片を含む。内外面とも赤黄褐色を呈する。調整は内外面ともにロクロの高速回転によるナデである。口縁部が薄く長めで、直立ぎみるのが特徴的である。6は底部付近の破片であるが、かなり傾斜がある。大型甕では通例より直立ぎみなので、この点から小型甕のものと判断できる。内外面とも赤黄褐色であるが、破片になってから二次焼成を受けたらしく、断面も含め部分的に黒色化している。胎土に石英、長石粒子を含む。調整は、内外面ともにロクロの高速回転によるナデである。3片が接合している。

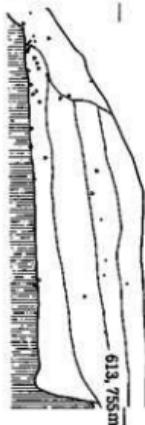
次に土師器壺であるが、甲斐型壺および内面黒色土器とが出土している。小片が多く図示で



第6図 1号住居址出土遺物(1)(1/3)



第7図 1号住居址出土遺物(2)(1/3)



第8図 1号住居址遺物分布図(1/60)

きるものは少ない。第6図7~10および12が甲斐型壺であるが、7~10は覆土である4層下部の床面直上から出土に対し、12は2層中から出土しているのでこの住居址の時期を示すものではない。7は底部破片で、体部内面に放射状の暗文がみられる。外面はヘラケズリである。底面も外面全体がヘラケズリされている。また、底部外面に墨書きがみられる。8~10は口縁部の破片である。端部がいずれも丸口縁である。また、内面に暗文がみられる。12は、口縁端部が玉縁となっており、甲斐型壺でも末期のものと思われる。内面黒色土器は、1点のみ図示でき

た(第6図13)。外面はロクロナデ、内面は研磨後に黑色処理され光沢を帯びる。

甲斐型の皿が1点出土している。第6図11で、外面は底部から体部中央にかけて回転ヘラケズリ、内面はロクロナデの後、同じ円状の暗文がみられる。口縁端部は丸口縁である。

土器としては他に、円筒形土製品がある(第7図1)。端部に近い部分で、丸みをもった肩部と、玉縁式の丸瓦の玉縁部のような突出部があるようである。内外面ともにロクロナデである。

須恵器壺の大型破片が出土している（第7図2～4）。2は4片が接合したもので、外面平行タタキメ、内面ナデ調整がみられる。暗灰色で、外面では白色、内面では緑色の点状の自然釉が一面均等に密にみられる。3は、外面黒灰色、内面青灰色で、外面平行タタキメ、内面ナデ調整である。外面に褐色がかったかすれたような自然釉がみられる。4は、外面黒灰色、内面灰色で、外面に網目状の細かな格子状タタキメ、内面に同心円状のタタキメがみられる。外面の一部に明るい褐色の自然釉がみられる。

1号住居址出土の遺物として、上記の土器の他に2点の鉄製品がある。第7図5は完形品の鎌である。最大長23.2cm、最大幅3.7cmである。先端部がくちばし状に湾曲し、基部の上方端部が折り返されている。6は、刀子の一部と思われる。

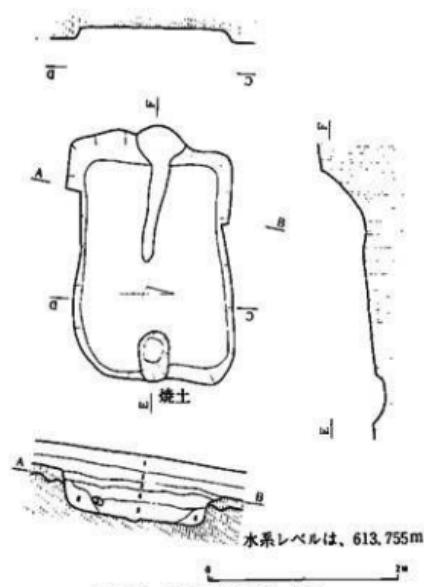
遺物の分布 1号住居址内の遺物の分布状況を第8図に示した。まず、土師器壺類の分布をみると、平面分布では、カマド周辺に集中している。甲斐型壺の土器片が量的に最も多く、また最も広い分布を示す。ロクロ整形壺の土器片や武藏型壺、円筒形土製品の土器片はよりカマドに近い位置、あるいはカマド内に分布する。垂直分布でも集中的で、ほとんどが4層の住居址覆土の下部、床面直上に分布している。

次に、土師器壺類であるが、量的に少ないものの、住居址全体に分散分布している。垂直分布をみると、4層中に大半が分布するが、若干のものが2層（旧耕作土）中に分布する。3層がほとんど無遺物なので、2層中の遺物がかなり後世になってからの流れ込みであることが推定できる。

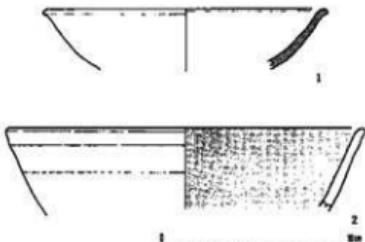
一方、須恵器類、特に壺の破片は、カマド周辺に集中分布し、垂直分布も床面直上にある。

このように、土師器、須恵器の壺類はカマド周辺に集中分布し、土師器壺類は住居址全体に分散分布している点が指摘できる。いずれも床面直上出土であり、住居廃絶時の遺物分布の状況を反映しているものと理解できる。

これに加え、鉄器の出土状況も注目される。刀子片は、カマド袖石北側脇の床面直上出土である。鎌は、東壁中央の周溝内で出土した。長軸を周溝の方向に平行にし、先端を北側に向け、刃部を周溝底面側にし、短軸を西側にかたむけた状態であった。周溝底面から15cmほど浮いており、床面とほぼ同じレベルで出土している（図版2）。



第9図 炭焼き遺構(1/60)



第10図 炭焼き造構出土遺物(1/3)

## 2. 炭焼き造構

**造構** 本造構は、調査地域の南部にある。緩斜面上に位置し、主軸をコンターラインと垂直に、傾斜の方向に向いている(第1図)。

隅丸長方形のプランを呈し、北辺、南辺が2.5m、西辺、東辺が1.7mである。深さは、西側の最深部で50cmである。長軸に沿って中央に浅い溝がみられるが西から中央部に至って断ち消える。西辺の中央がこの溝に連続してやや外側に掘り出されている。東辺中央部には浅い掘り込み

みがみられ、焼土が分布している。全体に混土木炭層が分布し、木炭の生産造構と思われる。

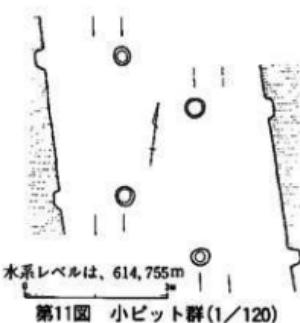
土層をみると、1層が黄褐色軟質土層で、1号住居址を覆う1層と同様にローム層が再堆積した風成堆積土層と思われる。2層は暗褐色土層で、やはり1号住居址の2層と同様に旧耕作土層と思われる。3層以下が本造構覆土である。3層は漆黒色土層で木炭はまったく含まない。4層は黒色土層で軟質。木炭をほとんど含まない。5層は混土木炭層。6層は黒色土層で木炭をほとんど含まず、ローム層ブロックを含む。5層の木炭層形成以前に6層の木炭片をあまり含まない層が形成されていることになる。木炭生産時に土で覆うような構造が考えられよう。掘り込み面は自然土層の黒褐色土であるが、2層の旧耕作土層で切られており、本来は3層のような自然土層の黒色土層上部に発達する漆黒色土層中から掘り込まれているのだろう。

**遺物** 本造構周辺も含め、平安時代関係遺物がほとんどである。甲斐型壺、甲斐型甕、内面黒色土器、須恵器壺、灰釉陶器碗などの小破片である。図化できたものを第10図に示した。1は灰釉陶器の碗の口縁部破片である。内外面とも全面施釉されている。白色で緻密な胎土である。口唇部がかなり薄く外湾する。2は内面黒色土器で、外面が赤褐色を呈し、白色微細粒子を多く含みやや粗い胎土である。口唇部が若干外湾する。

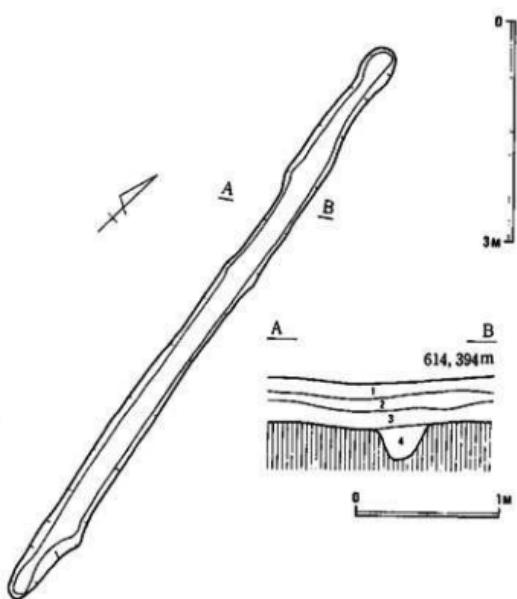
**遺物の分布** 遺物は周辺の状況からしても炭焼き造構に集中的に分布する。しかし、出土レベルをみてみると、2～4層にかけて分布していた。これらの土層は、本造構が廃絶して以降自然堆積したものと思われ、周辺からの流れ込みと理解できる。しかも、周辺遺物を含め、本調査地域に一般的にみられる近世陶器片の分布はみられるものの、土師質土器や内耳土器などの中世遺物の分布がみられない。両者の時期の違う遺物の出土レベルの違いで年代の判断を行うという方法もかなわない。したがって、平安時代遺物の出土をもって本造構がその時代のものであるとの判断はできない。

## 3. 小ピット群

1号住居址の西側で確認されたもので、4基の小ピッ



第11図 小ピット群(1/120)



第12図 1号溝(1/60)

トからなる。直径はおおむね40cm、深さ20cm前後である。菱形状の配列であるが、南北方向で3m間隔、北西—南東方向で2m間隔である。あるいは、後者の方向で1間2間の配列のもので、西隅と東隅の小ピットが消失したものとの理解も可能かもしれない。出土遺物はみられないので、時期の判断はできない(第11図)。

#### 4. 溝

1号から4号までの4本の溝がみられた。

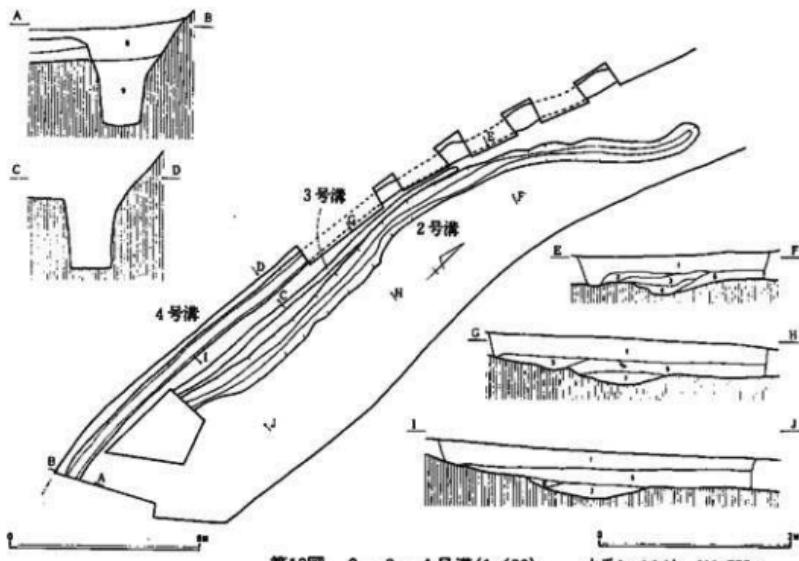
1号溝 調査地域の北東部にあり、段地形から地形傾斜方向に、ほぼ南北方面に直線的に設置されている。長さ4.5m、幅25cm、深さ20cm前後で

ある。土層をみると、1層が腐植層、2層が黄褐色土層。軟質でローム層の再堆積土層と思われる。3層が暗褐色土層で、黄色粒子を含み、非常に均質。旧耕作土層と思われる。4層が1号溝覆土の黒色土層。Pm-I粒子や木炭片を少量含み、軟質である。

遺物については、縄文時代、平安時代、中・近世の土器片が少量周辺より出土しているが、時期の決め手になるようなものは見当らない。

2号溝 調査地域の南端部で、段地形の直下に溝が3本平行してみられた。このうち2号溝は、最も東側にある。長さ25m、幅80~120cm、深さ15cm前後で、かなり蛇行している。底面は曲面で、横断面は皿状である。ただし、2号溝、3号溝とも一本のように作図してあるが、土層断面で示すとおり、何時期かの溝が複雑に重複しているものらしい。

土層をみると、1層は現在の耕作土。2層は北側のみにみられる土層で、ローム層ブロックを多く含む暗褐色砂質土層。3層は3号溝に連続する最も新しい溝の覆土で、黒色粘質土層。溝北半部にみられる。4層は北部にのみみられる2号溝覆土で、暗褐色砂質土層である。5層より新しく、中央部以南の2号溝より新しい溝と思われる。5層は全体に共通してみられる土層で、非常に軟質でローム層ブロックを多く含む暗褐色砂質土層である。遺物の多くはこの層に包含されていた。G-Hラインの断面では近世陶器が検出されている。旧耕作土層らしい。6層は2号溝と重複する、2号溝本体より新しい溝の覆土で、黒褐色粘質土層である。I-J



第13図 2・3・4号溝(1/60)

水系レベルは、611,755m

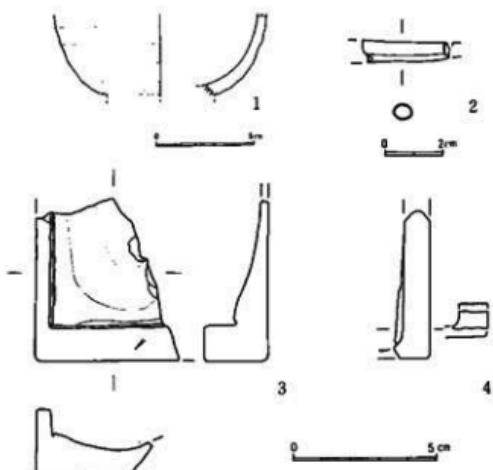
ラインの土層断面に3号溝の覆土が表現されていないが、非常に浅く、1層の新耕作土層ではなくとんど搅乱されているものと思われる。7層は2号溝覆土で、5層よりも明るい暗褐色砂質土層。Pm-I ブロックを含む(第13図)。

出土遺物は、中・近世関係のものが多い(第14図)。1は近世陶器の碗の破片である。内外面全体に黒褐色の釉が施されている。胎土は白灰色で緻密である。G-Hラインの土層断面にみられる陶器片はこれである。2は銅製と思われるキセル吹き口片である。3、4は、硯の破片である。灰色の粘板岩と思われる石材で、小型品である。この他磁石、土師質土器片等が出土しているが、ほとんど5層の旧耕作土層中出土である。

**3号溝** 2号溝に平行してみられる非常に浅い溝である。長さ15m、幅25cmで、深さは5cm程度である。微弱な窪みとして認識できる程度のものである。土層については、第13図のG-Hラインの3層が覆土であるが、南半部ではほとんど消失している。この断面より判断して、2号溝より新しいものと思われる。

**4号溝** 2・3号溝と違い非常に深い溝である。段地形の直下に設定されており、段地形全体にみられるものと思われる。上面の幅60cm、底面の幅40cm、深さ70cm前後である。壁は垂直に近い角度で、底面は平坦である(第13図)。

土層をみると(第13図A-Bライン)、8層が黒褐色土層で、根の進入が著しく、ボロボロの土層である。表土層と同一である。9層は茶褐色粘土ブロック層で、Pm-I直下の粘土層ブロックと8層が混在する土層である。9層は溝を掘り上げた時の堆土が落ち込んだものと思わ



第14図 2号満出土遺物

部が丸く仕上げられており、直線的に外傾する。口唇内側が黒色化しており燈明皿であったと思われる。2は、内外面とも赤褐色でかなり緻密な胎土である。口唇端がやや上方へ尖りぎみながら概して丸口縁である。外面中央付近に段状の高まりを持つ。内外面とも全面ロクロナデである。3は、内外面とも黄褐色で、微細な鉱物粒子を含むもののかなり緻密な胎土である。口縁部は平坦ぎみで、端部が外側に向ってやや尖りぎみである。また、口縁内側がやや肥厚する。内外面ともロクロナデ。4は、内外面とも赤褐色。砂粒をほとんど含まず緻密な胎土である。口縁部は丸く仕上げられている。5は、内外面とも白褐色で、砂粒をほとんど含まない緻密な胎土である。底部破片で、回転糸切り痕が残存している。これらの土師質土器は概して新しいもので、16世紀以降に位置付けられるものであろう。

第15図6・7は、内耳土器である。6は、内外面とも暗赤褐色で砂粒を少量含むが、かなり硬質である。内外面ともロクロナデである。器壁が体部側、底部側とともにかなり薄い。底部は砂蔵きされている。その砂は白色粒子と、黒色で光沢を持つ輝石が目立つ。7は、内外面とも黄褐色で砂粒を多く含むが、かなり硬質である。内外面ともロクロナデである。器壁はやや厚手である。底面に砂蔵きがなされ、白色粒子や輝石が目立つ。いずれも、内耳土器のうちではより後出のもので16世紀から17世紀にかけてのものであろう。

第15図8～12は、近世陶器の例である。8は、透明釉を基調に、濃緑色の釉が横方向に幅広く二条に施釉されている。胎土が肌色であるので、全体に肌色を呈している。口縁は直立し、体部下半が丸みを持つ。9は、内外面とも明茶褐色の釉が全面にみられる。胎土は白色緻密である。口唇がやや尖りぎみである。口縁は直立ぎみである。10は、茶褐色の釉が全面に施釉されている。胎土は肌色。口唇が平坦で、内側に端部が突出ぎみである。器壁がやや外傾する。

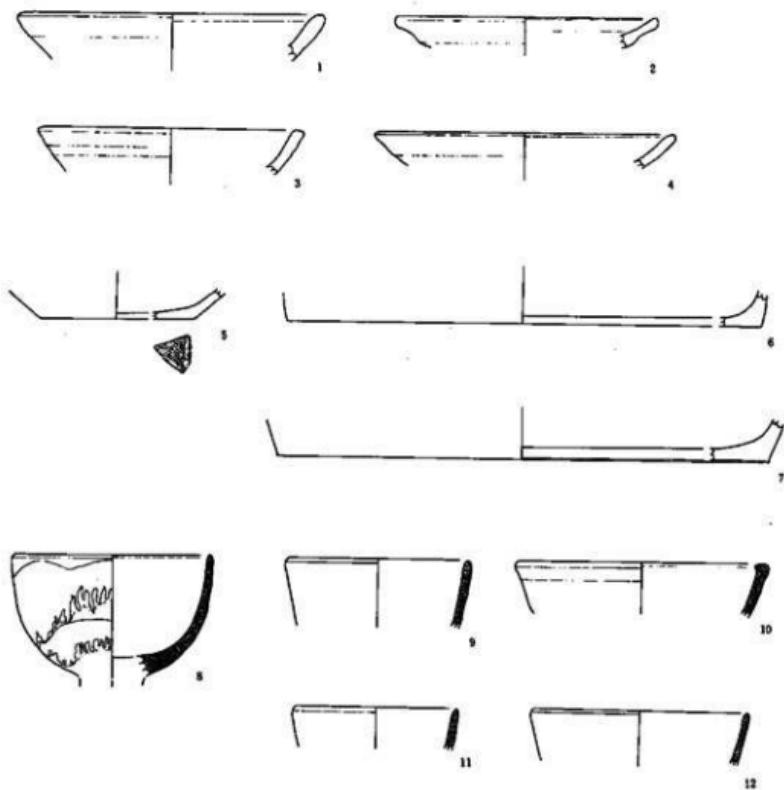
れる。掘り上げた直後にかなり急激に埋めもどされているような印象を与える。

出土遺物は、内耳土器片と縄文土器片が1点ずつ、8層中より出土しているのみである。

#### 5. 造構外出土遺物

今回の調査地域から、上述した造構にかかわる遺物の外に多くの遺物が出土している。これらは、縄文時代から中・近世に至る遺物である。

まず土器類であるが、土師質土器がある（第15図1～5）。1は、白褐色で砂粒を多く含む粗い胎土である。器壁がかなり厚い。口唇

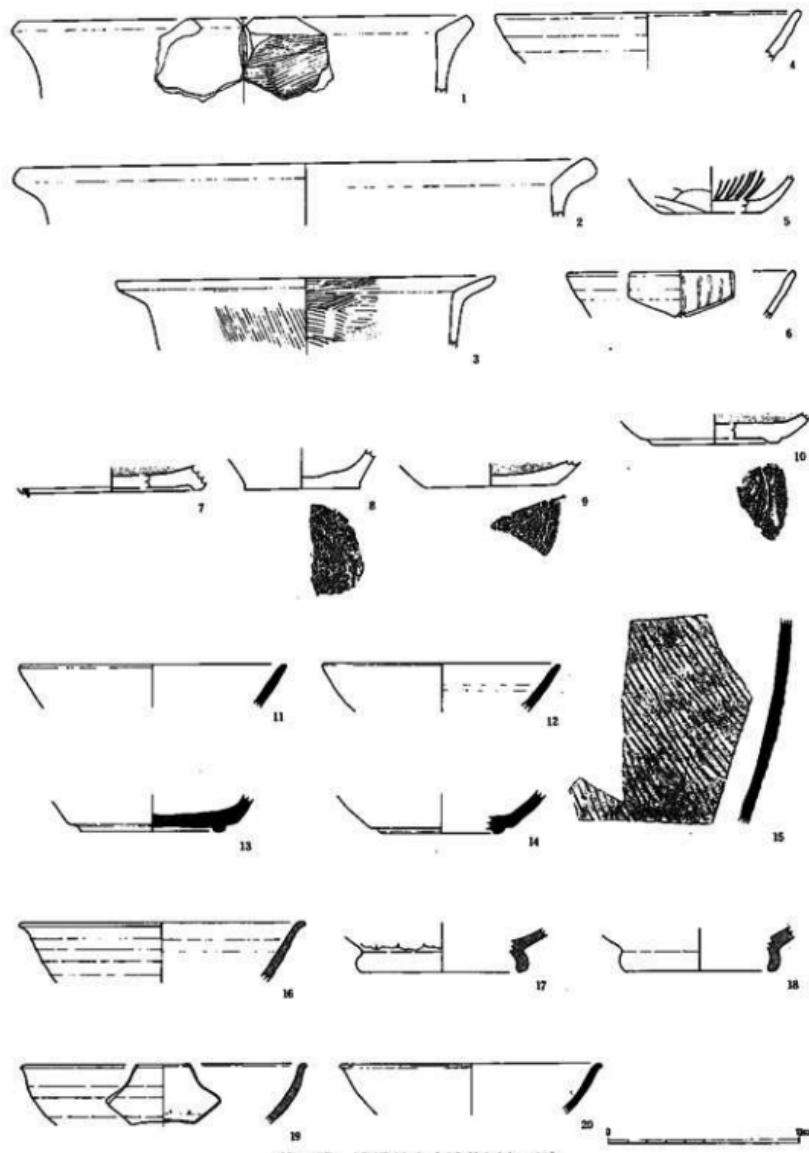


第15図 遺構外出土遺物(1)(1/3)

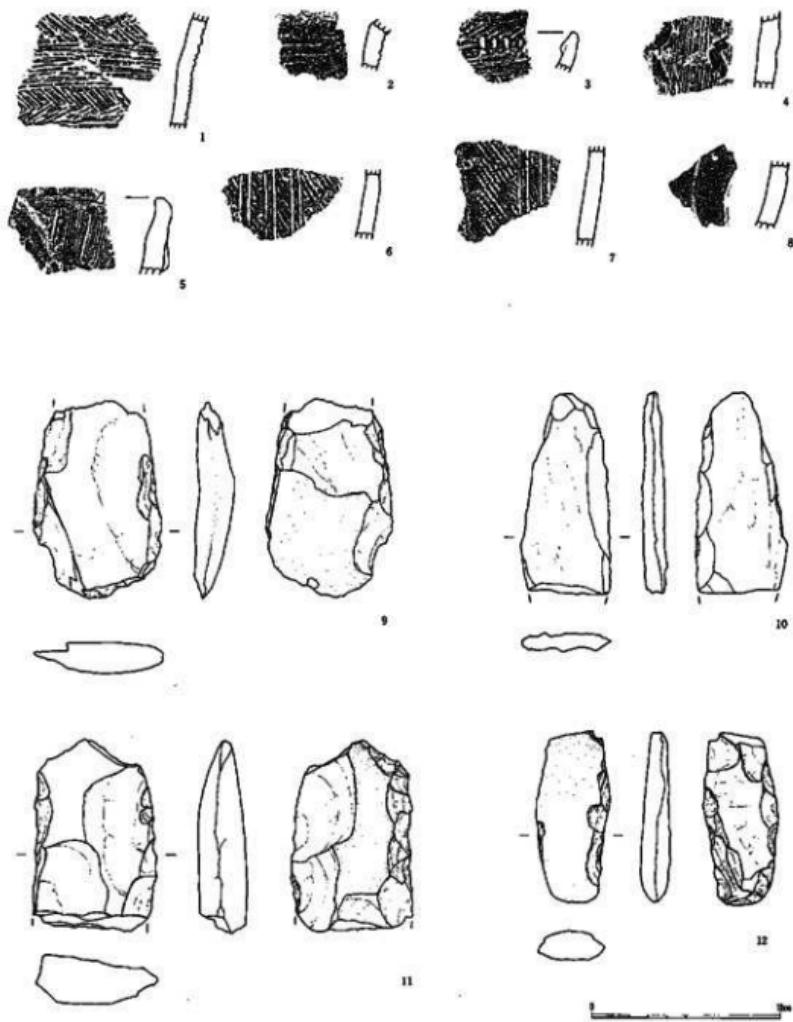
11は、白色の微細な点が密にみられる。茶褐色が基調の釉である。口唇端部は尖りぎみで、口縁は直立する。胎土は白褐色。12は、茶褐色の釉で、胎土は白色。口唇は丸く、直立ぎみである。これらはいずれも近世後半のものであろう。

第16図は、平安時代の土器頸である。まず、1～3は甲斐型頸である。1は、末広口縁型の口縁部である。10世紀中頃に位置付けられる。内面に横方向のハケメがみられる他は、ヨコナデされている。2は、厚口縁型の口縁部である。10世紀前半頃に位置付けられる。内外面ともヨコナデされている。3は、薄口縁型の口縁部である。おそらく9世紀後半頃のものであろう。胴部外面横方向ハケメ、内面は横方向ハケメ、口縁内面が横方向ハケメ、外面がヨコナデである。

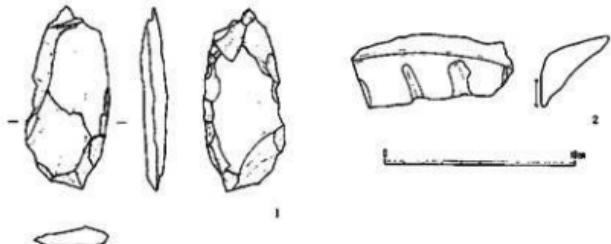
4～10は土師器坏である。4は、内外面とも暗赤褐色で砂粒を多く含む粗い胎土である。内



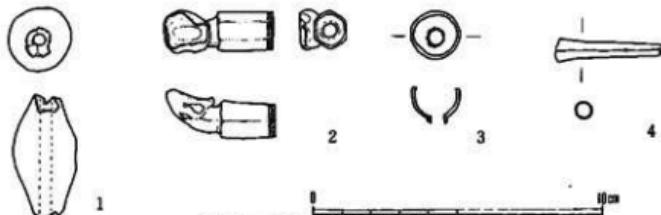
第16図 造構外出土遺物(2)(1/3)



第17図 遺構外出土遺物(3)(1/3)



第18図 遺構外出土遺物(4)(1/3)



第19図 遺構外出土遺物(5)(1/3)

面は研磨され、外面はロクロナデである。5、6は、甲型壺である。5は底部で、体部内面に暗文がみられる。外面はヘラケズリされている。6は、口縁部で、丸口縁である。内面は暗文がみられる。7および10は、削出し高台の高台付壺である。内面は研磨され黒色処理されている。いずれも白色粒子を含むやや粗い胎土である。9は、内面黒色土器の底部である。内面は研磨され黒色処理されている。外面はロクロナデ。底部は回転糸切りである。なお、8は、ロクロ整形の小型壺の底部である。これらは、いずれも9世紀後半から10世紀前半頃のものであろう。

第16図11～14および20は、須恵器壺である。11、12、20は口縁部破片。13、14は削出し高台の高台付壺底部である。13は灰色であるが、14は赤褐色で酸化炎焼成である。底面全体が削り調整されている。15は、須恵器壺の胴部破片である。外面平行タタキメ、内面ヨコナデがみられる。外面には緑色の自然釉がみられる。なお、図示はしなかったが、長野方面に多い凸帯付四耳壺の小片が1点出土している。

第16図16～19は、灰釉陶器の碗である。16、19が口縁部で、いずれも灰白色の緻密な胎土。ハケ塗りと思われる灰釉である。17、18は、底部高台部の破片である。17は、白褐色を呈し、底部内面全体と、体部外面に緑色の施釉がみられる。18は、白灰色で、底部内面に施釉がみられる。いずれも9世紀後半から10世紀前半にかけてのものであろう。

第17図1～8は、縄文時代土器片である。1は、細い半裁竹管状の工具で、条線文を施した

もので、色調は白褐色、胎土に白色粒子を多く含む。中期初頭の梨久保系の土器と思われる。2は、深鉢形土器の頸部破片で、押し引き状の条線が3本、普通の条線が1本平行してみられる。胎土に白色粒子を多量に含み、雲母片もみられる。中期初頭の五領ヶ台式期のものであろう。3は口縁部破片で、口縁端部が齒車状に仕上げられている。口縁内側が肥厚し、肥厚した部分に繩文が施文されている。外面は、浅い条線文がみられる。胎土に白色粒子や雲母を多量に含む。中期初頭、五領ヶ台式期のものであろう。4は、縦方向の条線文を地文に、波状の粘土紐が貼付されている。白色粒子を多量に含む。中期末の曾利式期のものと思われる。5は、口縁部破片で、条線文と隆帯とが施文されている。白褐色を呈し、黒色粒子、白色粒子、輝石などを多く含む。後期初頭のものと思われる。6、7は、縄文地文に縦方向の条線が2本単位でみられる。白色粒子の他雲母の存在が目立つ。中期初頭、五領ヶ台式期のものと思われる。8は、弧状の条線文が2条みられ、外面がかなり平滑に仕上げられている。白褐色で砂粒の存在があまり目立たない。硬質な胎土である。後期前半のものと思われる。

第17図9～12、および第18図1は、縄文時代の打製石斧である。1は、撥形で基部を欠損する。母岩の円礫面が残存する。粘板岩製。10は、撥形の基部である。風化が著しい。粘板岩製である。11は、短冊形の基部で、砂岩製である。12は、細長い短冊形の完形品である。母岩の円礫面を広く残す。粘板岩製。第18図1は、短冊形で、刃部および基部を若干欠損する。粘板岩製である。

第18図2は、石臼の破片である。深さ3mmほどの溝が斜方向に掘り込まれている。多孔質の安山岩製である。中世以降の所産である。

第19図1は、土鍤である。長さ4.2cm、幅2.1cm、重さ16gである。中央がふくらみをもち、両端が細くなる。径4mmの穴が貫通している。黄褐色を呈し、胎土にあまり砂粒は目立たない。穴の部分が両端とも若干欠損する。平安時代以降のものであろう。

第19図2～4は、キセルの部分である。2、3がガシクビ、4が吸い口である。いずれも銅製と思われる。近世のものであろう。

## VI 地すべり地形について

今回の調査地域では、段状の地形がコンターラインに沿って4段にわたってみられた（第20図I～IV段）。この段状の地形の成因について検討するため、特に比較的大きいII段の段状地形に直交して調査溝を2カ所設定し土層断面を観察した。また、帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏に調査していただいた。その結果、以下のとおり地すべり地形であるとの結論を得た。

### 1. 土 層

Aトレンチ II段の段地形に直交方向で設定したトレンチで、長さ6m、深さ2.2mである。1層は、1号住居址や炭焼き造構の1層同様、黄褐色軟質土層でローム層の風成二次堆積土層と思われる。2層は本調査地域に広くみられる暗褐色土層で、旧耕作土層と思われる。3層は本トレンチに特有な土層で褐色土層である。黒色土層の上位にある点に注意。4層は黒色土層

であるが、上方で消失している。5層は暗褐色土層で、黒色土層とローム層との漸移層と思われる。やはり上位で消失している。6層はソフトローム層である。7層はハードローム層である。6、7層ともに地すべり面に切られれている。また、地割れもみられる。8層はPm-Iを多く含むハードローム層。9層はPm-Iである。9層より下位には茶色で硬質の粘土層がみられる。なお、本トレンチでは土壤分析用の土壤サンプルを採取した（第20図①～⑤）。なお、この番号は第21図No.1～No.5に符号する。

Bトレンチ II段のほぼ中央に設定したトレンチで、長さ5.5m、深さ1.6mである。1層は、Aトレンチ同様に暗褐色軟質土層の風成堆積層である。2層も同様に、暗褐色土層で旧耕作土層と思われる。2層は3、4層を切り込んでいる点注意。3層は黒色土層。4層は黒褐色土層である。5層はレンズ状に分布するもので黒色土層である。6層はソフトローム層、7層はやはりソフトローム層であるが、Pm-Iブロックやハードローム層ブロックを多く含んでいる。8層はハードローム層で、6層ソフトローム層同様に地すべり面によって切られている。9層はPm-I層である。上位方向ではすべり面に切られており、下位方向では、その上面がかなり乱れている（第20図）。

Cトレンチ I段地形とは別の部分で、調査地域中央付近に設定したCトレンチ（第20図）で地すべり面が観察できた。1号住居址北側にあたる所で、長さ5m、深さ最大1.5mである。1層は腐植土層である。2層は暗褐色軟質土層で、風成堆積土層である。3層は暗褐色土層で、旧耕作土層である。4層は黒色土層であるが、3層にはほとんど切り込まれ、部分的にしか存在していない。5層は暗褐色土層で、黒色土層とローム層との漸移層である。その下部に、ハードローム層ブロックを含んでいる。6層はハードローム層とソフトローム層とが混在する土層である。ハードローム層ブロック中に三岳スコリアMtS (Pm-IV) がみられるものがあった。特に第20図に図示したように、Pm-IV層を含むハードローム層ブロックが、Pm-IV層の堆積面を縦にした状態で固定されているものがみられた。この点からして、6層は地すべり時にかなり擾乱を受けた土層と理解できる。7層はPm-I層であるが、その層中ないしは下底面に地すべり面がみられた。7層より下位は茶色で硬質の粘土層である。

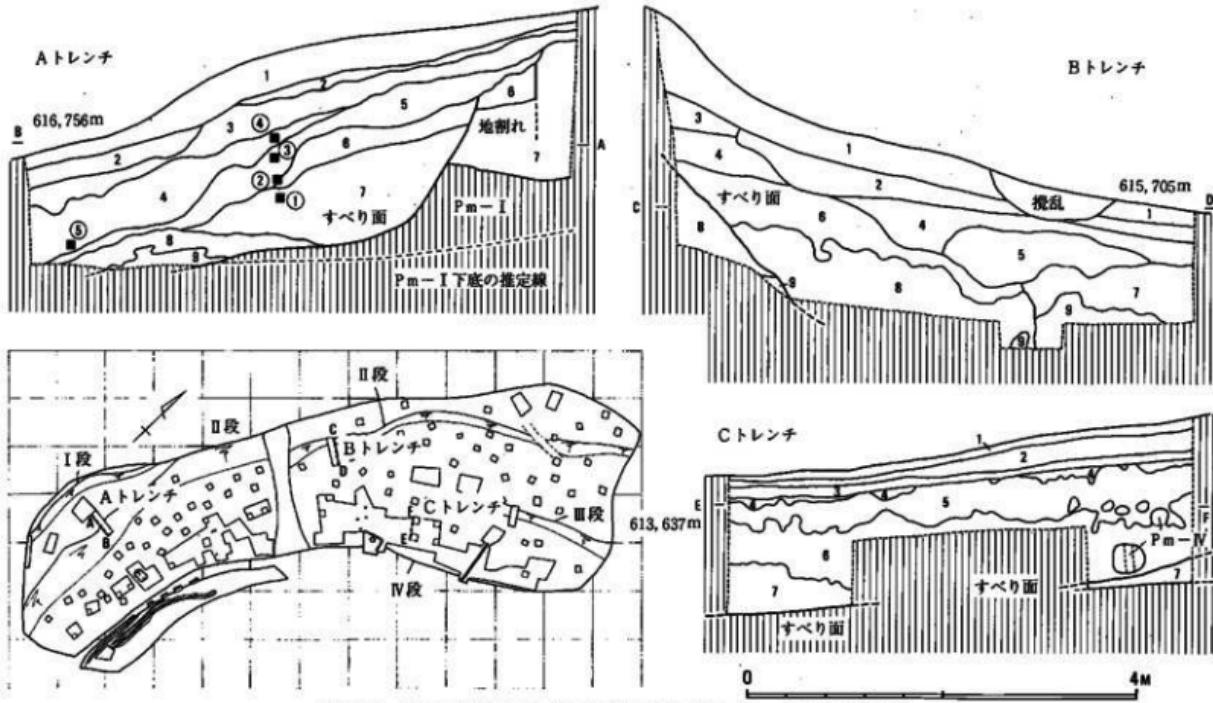
なお、III段の南部に調査溝を設定してみたが、地すべり面は確認されなかった。黒色土層やソフトローム層が旧耕作土層の暗褐色土層に切り込まれており、耕作による人為的な段であることが推定される。

I段については特に知見はない。IV段についても、特に調査溝を設定しなかったが、2～4号溝調査時の所見では、Pm-I層やそれより下位の茶色硬質の粘土層が露出しており、耕作による削り込みが著しいようである。しかし、この段自体の形成が人為的なものとは断じがたい。

（保坂）

## 2. 高根町湯沢遺跡の地すべり地形

本遺跡は、八ヶ岳からの岩屑流堆積物を基盤とする八ヶ岳南麓に立地している。遺跡周辺では甲川・鳩川の開析によって台地面と比高40～80mの谷が形成されている。遺跡北部の三角点(619.9m)を頂点とする小さな高まりは、垂崎岩屑流堆積物に伴った流れ山である。新設され



第20図 地すべり地形土層断面図(土層断面図1/60、位置図1/1500)

た道路両側露頭での岩屑流堆積物は安山岩の角礫を多く含む。周辺には同規模の流れ山が点在し、流れ山に囲まれた台地面は開析された緩斜面から構成される。岩屑流堆積物の堆積面の上位には褐色ローム層・赤褐色粘土質層が堆積し、非整合に厚さ約1mの黄橙色を呈する御岳第一軽石Pm-Iが堆積する。Pm-Iの上位には約3m以上の褐色ローム層が堆積している。今回の調査範囲は流れ山の南斜面に位置する。斜面は南東傾斜で三段の地形面が存在する。前回1983年の発掘調査では平安時代の住居址・掘立柱建物址群がさらに下の地形面で検出されている。

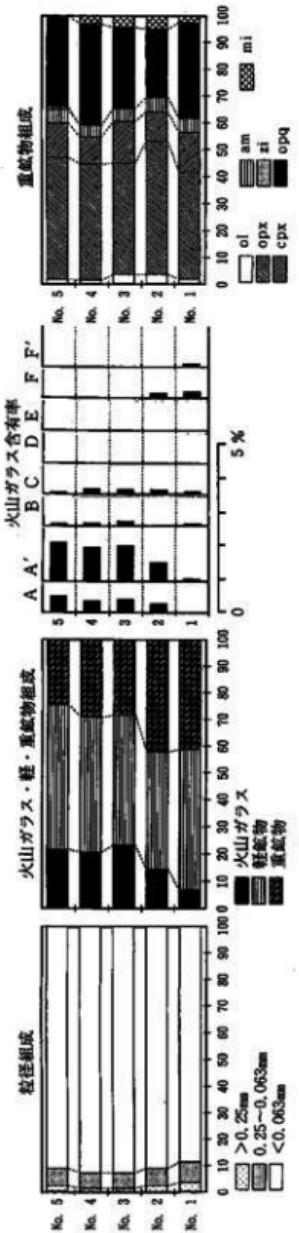
**Aトレンチ** 本トレンチは地形面に直交する。暗赤褐色粘土層を基盤にして上位にPm-Iが分布する。Pm-Iは、トレンチ上部で厚さ55~75cmのほぼ水平方向の分布を示すが、斜面下方にむかって急激に傾斜しあつ厚さを減じ、全体として上に凹の弧状に分布する。その上位には上に凹のレンズ状に暗褐色土層が堆積している。全体に硬く特に下部は硬質である。この硬質土層とPm-Iとの境界は上部において南北走向( $N2^{\circ}E$ )、 $52^{\circ}$ 東傾斜を示す。その上には軟質暗褐色土がおおい、さらに黒色~黒褐色土がレンズ状堆積を示す。この黒色土は、丘の公園地域の完新世黒色土と類似している。これらをおおう最上部の3層は、現地表面に平行に堆積しており斜面安定後の堆積物と推定される。Pm-Iおよび上位の暗褐色硬質土層の関係からPm-Iをすべり面とした地すべりが推定される。この地すべりには、風化した多孔質軽石からなる透水層としてのPm-Iと不透水層としての下位層とが大きく関与していると考えられる。

**Bトレンチ** 本トレンチはAトレンチに平行し地形面に直交する。山側には自然堆積と考えられるPm-I以上の堆積物があり、これを北東~南北走向( $N43^{\circ}E$ )、 $55^{\circ}$ 南東傾斜のすべり面を境に斜面側にはブロック状の褐色硬質風化火山灰層や黒色土層がレンズ状に分布し、それらをやや赤みを帯びた暗褐色土がおおう。その上位には平面的な不整合面を伴って黒褐色土および暗褐色表土がおおう。この不整合面は、Cトレンチとの関係から江戸時代以降の人为活動によるものであろう。すべり面は、Pm-Iを切ることからより下位に推定される(第20図)。

**Cトレンチ** Pm-Iより下位は普通の堆積であるが、Pm-Iの上部が上位の二次堆積層によって不整合におおわれる。二次堆積層は厚さ約50cmであり、やや軟質の黒褐色土をマトリックスにして最大30cmのハードロームブロックを不規則に伴う。ブロック中には三岳スコリアMtS(Pm-IV)の赤褐色スコリアが鉛直方向に認められる。ブロックの二次堆積は、少なくともMtS降灰(約5.7万年前、竹本ほか、1987)以降にブロックの回転を伴う堆積作用で生じたものと推定される。その上位には凹凸のはげしい波状境界をもって暗褐色土層が、径約10cmのハードロームブロックを伴い厚さ45~55cmで堆積し、さらに上位には厚さ約15cmの褐色土層が重なる。これらを不整合におおって暗褐色土層が堆積している。不整合面は現地表に平行で直線的な境界を示す。不整合面直上には、綱文・平安・江戸時代の各遺物が混在して包含される厚さ約10cmの暗褐色土層が堆積し、さらに約20cmの暗褐色土層、10cmの暗褐色表土が重なる。不整合面の形成は江戸時代以降の耕作などによる人为的改変によってもたらされた可能性が高い。

#### テフラ分析結果

Aトレンチで堆積物中のテフラの検出を目的として5点試料採取した。分析法は従来の方法



第21図 湯沢達磨Aトレンチの粒径組成、火山ガラス・軽・重鉱物組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成  
ol カンラン石 opx 斜方輝石 cpx 透辉石 am 角閃石 zi ジルコン opq 不透明鉱物 mi 鎧母

(河西、1990) と同様である。粒径組成は1/16以上砂分があわせて10%前後からそれ以下である。火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成では、火山ガラスの占める割合がNo. 1では数%と少ないが、Nos. 2～5では15～24%と多い。形態別火山ガラス含有率では、Nos. 2～5においてパブルウォール型（A-A'型）が多く含まれる。試料No. 3の火山ガラスの屈折率は、1.498～1.502（モード1.500）である。したがってこれらの火山ガラスは約2.1～2.2万年前の始良Tn火山灰（AT；町田ほか、1976）に同定される。しかし火山ガラスの含有率の明瞭な極大は、今回確認されなかった。地すべりによって移動したブロック（No. 1）は、AT以前の堆積物と推定される。すべり面の上端をおおう暗褐色土層（試料Nos. 2, 3を含む）はAT以後の堆積物と考えられる。Nos. 2, 3の火山ガラスはAT降灰後の再移動などによって拡散したものと推定される。またCトレンチでの地すべりブロックのなかにMtS（Pm-IV）が確認されている。これらのことから地すべりの活動期は、テフラから見た場合約5.7万年前以降でさらに約2.1～2.2万年前より新しい可能性がある。なお他の形態の火山ガラスは微量検出されるにすぎない。

黒色土は、完新世以降の堆積物で八ヶ岳南麓では縄文時代の包含層としてとらえられている。Aトレンチでの黒色土は凹凸のあるレンズ状堆積を示す。Bトレンチでは、黒色土がブロック状に存在することから、黒色土が堆積後にブロック状に移動した可能性が推定される。両トレンチの黒色土直下に明瞭なすべり面は認められない。しかしPm-I付近をすべり面とする地すべり現象が認められることから、同一の地すべりによるのか不明であるが、縄文時代以降に凹凸の堆積を示すようなマスマーブメントの一層が存在した可能性が暗示される。

以上のように、湯沢遺跡の段丘状平坦面群は地滑り地形と推定される。その後おそらく農耕など人为的地形改変によって地表面が削平され現在にいたっているものと推定される。

(帝京大学山梨文化財研究所 河西 学)

文献 遠藤邦彦・鈴木正章(1980)考古学と自然科学、13、19-30。

河西学(1990)山梨県埋蔵文化財センター調査報告、52、「中込遺跡」、36-40。

町田洋・新井房夫(1976)科学、46、339-347。

竹本弘幸・平瀬貴・平林潔・小林武彦(1987)第四紀研究、25、337-352。

## VII 結 語

本調査地域では、縄文時代の土器、石器、平安時代の住居址1軒、炭焼き遺構1基、中・近世以降の溝4本、時期不明の小ピット群1カ所、中・近世の土師質土器や陶器が出土した。

まず、1号住居址は、床面直上出土遺物群から判断して、甲斐編年IX期(坂本・末木・堀内1983)のものと思われる。遺物の出土状態をみると、床面直上から大半の遺物が出土している。かなり厚い無遺物層が住居址を覆っていた。このことから、住居址内の出土遺物の多くは、住居址廃絶時の遺物の分布状況をかなり反映しているとみることができる。平面分布をみると、土師器、須恵器ともに甕類はカマド内からカマド周辺に集中分布し、土師器壺、皿類は全体に分散分布していた。甕類は接合するものがかなりあるが、いずれも復元率が低く、小破片が目立つ状況である。甕類については、住居廃絶時における什器類の廃棄行為に関連する可能性を考えられよう。壺類については、小破片が多く、単に住居使用時のそれらの使用空間を示すものかもしれない。一方、鉄製品の出土状態も注目される。刀子片がカマド脇より出土しており、カマドの廃絶時の何らかの行為との関連を連想させる。鎌については東壁中央直下の周溝内にみられた。周溝底面より15cmも浮いており、そこに置かれたものかどうかは断じ得ない。しかし、大型の完形品であり、こうした品物自体住居址内に残されていたことが奇異である。この住居址が湯沢遺跡の集落の最南端にある点など、集落全体の分析からこの意味が検討されるべきであろう。

次に炭焼き遺構であるが、平安時代の遺物が出土しているもののその所属時期については保留した。同類の構造を持つものが須玉町中尾城遺跡や高根町丘の公園第5遺跡などで検出されている。中尾城遺跡では中世の所産と思われる掘建柱建物址の柱穴に切られており、これ以前と考えられるが、出土遺物がまったく見られず、明確な時期の決定ができない状況である。遺物がみられる点では、今回調査したもののが唯一ということになるが、ここでは平安時代に帰属する可能性があるかどうか考えてみよう。まず、炭を生産する必要性であるが、平安時代の八ヶ岳山麓には小鍛冶遺構の分布がみられ、これらの活動に炭を必要とする。したがって、平安時代にも存在していても不思議ではないと思われる。おそらく、奈良時代以前には比定できないと思われる。平安時代まで残りうる可能性を指摘するにとどめたい。なお、もし平安時代の可能性があるとするならば、1号住居址出土の円筒形土製品は、この炭焼き遺構の中央の溝部分に敷設し、通気のために用いられたとは考えられないだろうか。

本調査地域が地すべり地形である点も大きな成果である。地すべり地形については、丘の公園第2遺跡で、遺跡立地面自体が大規模な地すべり地形である点が指摘されている（河西 1989）。丘の公園第2遺跡では、AT直後と古い年代のものであるが、地すべり地形の存在やその年代、またそうした地形を利用して遺跡が立地している点が明らかになったことは重要である。湯沢遺跡本体の立地する平坦な地形面は、丘の公園第2遺跡の立地面にかなり近似する点があるが、地すべりがその成因かどうかの確認はできなかった。今後、遺跡の立地地形の一つとして地すべり地形が意識的に検討されることが期待される。

#### 引用・参考文献

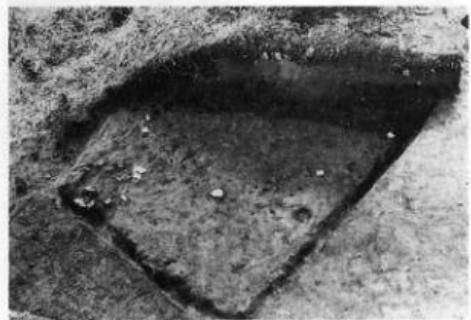
- 山路恭之助、深沢裕三 1983 「大小久保遺跡」 須玉町教育委員会  
雨宮正樹 1983 「山梨県湯沢遺跡」『日本考古学年報』36 日本考古学協会  
坂本美夫・末木健・樋内真 1983 「甲斐地域」『シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題』神奈川考古同人会  
山路恭之助、深沢裕三他 1984 「中尾城遺跡・塚田遺跡」 須玉町教育委員会  
山梨県教育委員会編 1986 「山梨県の中世城館跡」  
山梨県編 1986 「土地分類基本調査 荘崎・市野瀬」  
河西学 1989 「丘の公園地域のチカラと地形」『丘の公園第2遺跡』 山梨県教育委員会



調査地域近景（北から南半部を望む）



調査地域近景（南から北半部を望む）



1号住居址（北から）



1号住居址（東から）



1号住居址カマド周辺遺物出土状況



1号住居址カマド

図版 2



1号住居址床下ピット



1号住居址鉄鎌出土状況（南から）



炭焼き造構（東から）



小ピット群（北から）



2・3号溝（北から）



1号溝（北から）



4号溝（北から）



地すべり地形断面（Aトレンチ）



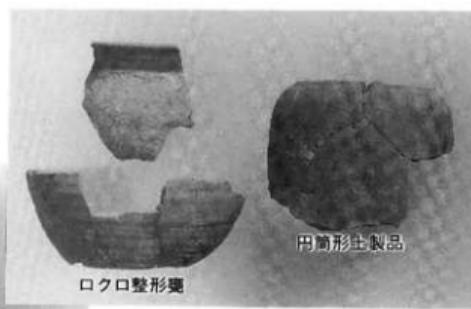
地すべり地形断面（Cトレンチ）



地すべり地形断面（Bトレンチ）



鉄鎌



円筒形土製品

口クロ整形甕



甲斐型甕

1号住居址出土遺物

## 湯沢遺跡調査概要

フリガナ	ユザワイセキハツツチヨウサホウコクショ	
書名	湯沢遺跡発掘調査報告書	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第57集	
主著者・従業者	保坂康夫・浅利 司	
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土地開発公社	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根923 0552-66-3016	
印刷所	合資会社 ヨネヤ印刷	
印刷日・発行日	1990年3月20日 1990年3月31日	
	所在地	山梨県北巨摩郡高根町下黒沢湯沢
	25000分の1地図名・位置・標高	若神子 北緯34°47'28" 東経138°23'55" 標高615m
概要	主な時代	縄文時代中期・後期、平安時代前半、中・近世
	主な遺構	平安時代堅穴住居址1軒、平安時代以降炭焼き造構、中・近世溝4本、小ピット群1カ所
	主な遺物	縄文土器、石器、平安時代土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄鎌、刀子、中・近世土師質土器、陶器など
	特殊遺構 特殊遺物	
	調査期間	1989年7月31日～1989年10月26日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第57集

### 湯沢 遺跡

印刷日 1990年3月20日

発行日 1990年3月31日

発行所 山梨県教育委員会

印刷所 合資会社 ヨネヤ印刷

